

## 『兵部卿物語』の成立時期をめぐって

辛島, 正雄  
九州大学文学部助手

<https://doi.org/10.15017/10483>

---

出版情報 : 文献探究. 13, pp.1-9, 1983-12-25. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



# 『兵部卿物語』の成立時期をめぐって

辛 島 正 雄

1

中世擬古物語『兵部卿物語』の成立時期に関しては、つとに黒川春村が『古物語類字鈔』において、

按に、此物がたりは、頗、作意見えて、古物語めきたる物にはあれど、をりく、つたなき詞どもまじり、かつ、色葉・風葉・無名草子、寧にも見えねば、室町の中頃などに、作れりし物なるべし。

と述べていたのであるが、平出鏗二郎は『近古小説解題』（明42）において、

されど色葉集等に見えずとて室町時代とおしあつるもいかゞ、頗る古風のものなれば、なほ十分に考ふべし。

と春村説の行き過ぎを批判し、再考を促した。さらに、これらを承けて、山岸徳平氏は、

詞違ひ文体共に鎌倉期のものに相違ない。今風葉集以後で鎌倉末期と見る。

と推断されたのであった。爾來、もっぱらこの山岸説が踏襲され、今日まで五十年余り、とくに異論の提出されることもなかつたようである。

しかしながら、ほとんど定説化しているように見えるこの説も、実は何ら詳しい論証を経て導き出されたものではない。氏の判定の根拠は、前掲引用文に尽きる。にもかかわらず、いささかでも疑義

を呈する者があらわれなかつたというのは、不思議ななしである。あるいは、調査は試みたものの、とくに山岸説と抵触するような徴象は見いだせなかつたということか。

ところが、いざ作品と相対してみると、ヤツとながめわたしたたけでも、「鎌倉期のものに相違ない」とするにはやや抵抗を感じる語彙等が、少なからず見うけられるように思う。中でもとくに目に立つものとして、次のような例が挙げられようか。

① あらあらしきいたまのすきかけよりともしひとほのかにみえかくるゝを (641ペ下18行)

② かうしのすきかけよりのそき給へは (642ペ上13行)

常識的には「透影」として問題はないはずだが、文脈上はいずれも〈隙間〉の意と解さざるをえない。『日本国語大辞典』（昭47）51。以下『大辞典』と略称する）にこの意の「すきかけ」の項なし。誤用か。

③ かゝるくたくたいきあたりにはにつかはしからぬものゝねなり (642ペ上1行)

文脈上、繁雑な、の意では通じない。身分卑しい、下賤な、といった意味で、漢字を宛てるとすれば「下々し」とでもなるうか。『大辞典』にこの意の「くだくだし」の項なし。これも誤用か。

④ おい入ふかう (661ペ上13行)

「老人夫婦」である。漢語「夫婦」の和文中での用例は、『大辞典』による限り、お伽草子等に諺「夫婦は二世」として見えるほかは、

古いものがない。ちなみに、石川徹氏が、この物語中の不審語として挙げておられる。

⑤おきなまついりて女ほうにしかくとかたりければ

(661ページ下10行)

「女房」を今日同様の「へ妻」の意で用いた早い例として、『大辞典』は『太平記』を挙げる。

⑥しのひの御ありきなれといなかひとことくしく思ひて(中略)  
さうく、しきまでいひければ

(664ページ下19行)

明らかに「騒々し」である。『大辞典』の用例には、いきなり中世末期の『饅頭屋本節用集』『日葡辞書』『三河物語』等が並ぶ。なお、『講座日本語の語彙 第10巻 語誌Ⅱ』(昭58)所収の「そうぞうしい」の解説(菊田紀郎氏担当)でも「我國でこのへさうざうし」に古い用例は見出しがたい」とあり、初例に『三河物語』を立てる。

⑦あやしきしをりとなとかため

(665ページ上1行)

「枝折戸」。『大辞典』の用例には『看聞御記』を第一に挙げる。狂言・抄物等にも所見あり。

国語史的な見地から成立時期を考えるのならば、もつと多くの事例につきさらに詳細な検討を行うべきであるが、畑達の筆者はその適任ではないし、本文を考えるのに翻字にやや問題のある『続々群書類従』本しか見ていないこともあり、ひとまず素朴な疑問として提出するにとどめたい。山岸説再考の要を説くには、その疑問さえあれば十分であろう。

以下、いますこし確実性のありそうな内部徴証を探ってゆくことにする。

## 2

物語も末尾近く、失踪した愛人按摩使の君が、嵯峨の奥、小倉の

寺に尼となつてゐるらしいとの噂を聞き、紅葉狩りにかこつけて訪ねてきた兵部卿宮を、寺の中から固唾を呑んで見守る女房侍従のようすを叙して、次のようにある。

タフ方、(兵部卿宮)御遊びなども果てて、こころ御覧せんとて出でさせたまふ。田の中の細道を御答にてしめやかに歩ませたまふを、この間の隙々より見やらるるを、云々 (665ページ上)  
ここに見える「田の中の細道」なる表現に注目したい。この語句からただちに連想されるのは、次のような一文であろう。

あやし竹の編戸の内より、いと若き男の、月影に、色あひさだかならねど、つややかなる狩衣に、濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、ささやかなる童ひとりを具して、はるかなる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつつ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらずと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送りつつ行けば、笛を吹きやみて、山のきはに惣門のある内に入りぬ。

『徒然草』第四十四段——つとに兼好の尚古趣味をいかになく發揮した名文として名高く、あたかも王朝物語の一齣を見る観がある。筆者は、『兵部卿物語』のこの語句は『徒然草』から得たものと見たいのであるが、それをいうためには、『徒然草』の表現が兼好独自のものであったことを証しておく必要がある。

稲田利徳氏は、『徒然草』の王朝的章段の虚構性の問題を論じられた中で、右の四十四段についても微細にわたつて表現の発想の原拠を探られているが、そこで次のように述べられた。

「遙なる田の中の細道」を分け行く構図は、第一一段の「遙かなる苔の細道をふみわけて」と一致するし、「浮舟」の巻にも「常よりもわりなき稀の細道を分け給ふ程」とのくだりもあるが、兼好好みの構図であろう。

諸注釈書を参照しても、稲田氏の見解以上に出るものは、皆無である。おそらく、この一句の典故といえるような和歌なり物語の文章なりは、見いだしがたいと判断してよいのであろう。さらに、稲田氏の引用文中にあつた第十一段の「遙かなる苔の細道」なる一句について、「兼好がふまえた精神的・文学的伝統などを知る」べく詳密な語釈を展開した三木紀人氏の『徒然草全訳』(昭54・57)では、「先行例未詳」と特記しているのである。近世以来持統された宮々たる注釈の積み重ねの中で考えうる限りにおいて、「田の中の細道」は兼好創始の文辞と考えて、さしつかえないようである。

もつとも、一方で、『兵部卿物語』のこの一句こそ、兼好の盗み取つた知られざりし原拠だったので、と見ることも不可能ではない。しかし、『兵部卿物語』は、その流布の形跡すらつかみかたく、逆のケースは問題になるまい。また、両者が、「田の中の細道」を歩む貴公子を観察するというかたちで、人物配置に共通する点があるのも、有利な材料である。叙述も『徒然草』の方が詳しい。やはり、『徒然草』第四十四段の優美な詞章にひかれて、『兵部卿物語』の作者がその一句を借り用いた、と考えるのが自然であらう。

以上の筆者の推測が当つているとすると、『兵部卿物語』の成立時期は、『徒然草』成立以降でしかありえず、早くとも南北朝以後ということになつてくる。

いつたい、中世擬古物語における『徒然草』の影響ということとは必ずしも研究者にとつて自明のことではないようだ。中に、從來やうした指摘のなされてきたものとして、『八重葎』を挙げることもできる。『八重葎』は、それゆえ、めずらしく南北朝期成立とされているわけである。

ところで、この『八重葎』を初めて紹介・解説した堀部正二氏は、『徒然草』の投影を指摘しながらも、その一方で、

一体、此の物語を一読して直覚するものは、決して南北朝頃でなく、鎌倉初期或は中期頃の色調である。

この実感をもたらされ、されど、外部徴証を欠き、「たとへ後世と雖も文才さへあれば古体の物語をかく事も強ち不可能ではない」ということで、結局南北朝期成立ということに定められたのであつた。この堀部氏の慎重な対処ははからずも暗々裡に示唆しているように、中世擬古物語の成立時期を文章等の感觸のみを頼りに云々するのは、大きな危険を伴うものようである。ここまでもつぱらその非を追及するかたちになつてしまつた山岸氏の判定も、実はいちがいに早計とばかりもいえないのであつて、かえつてそれだけこの『兵部卿物語』という作品が、古色を帯びて巧みに形造られたことを示す証左とも見做しえようか。

### 3

次に、『兵部卿物語』研究史上もつとも重要なものの一つといつてよい、佐々木八郎氏の論考にふれておきたい。佐々木氏はそこで、『兵部卿物語』に『平家物語』との交渉の跡のあることを指摘されたのであるが、中に、出家して小倉の寺に寂しく日を送るヒロイン按察使の君の心境を叙した、

かくて、夏も暮れぬ。初秋の頃は、星合の空をながめても、さはいへど、過ぎにし年のこの頃の事など、今のやうに思ひ出でつつ、云々 (664頁上)

という一節につき、「明らかに『平家物語』の△妓王▽の嵯峨野のくだりと無関係ではないように考えられる」とされたのは、まさしくそのとおりであらう。そこには次のようにある。

かくて、春すぎ夏たけぬ。秋の初風吹きぬれば、星合の空をながめつつ、天の門わたる梶の葉に、思ふ事書く頃なれや。

(卷一104ペ)

他に、佐々木氏の指摘されなかつたものとして、例えば、失踪した愛人をわが妻の侍女の中に見いだした兵部卿宮が、夜、その女の局に忍んで訴えることは、

恨めしうも思ひ捨てつつふり離れむとしたまひしかど、朽ちぬ機縁にて、思はずなるさまにてめぐりあひにしこそ、いふにもあまるうれしきなれど、かう見る目の契りばかりにては、ちかのしほがま、思ひこがれんも、びんなきわざなり。今宵もかうしてかうまでもたどり寄りしを、今さへなきけなきもてなしにもあるかな。  
(658ペ下と659ペ上)

ここに見える「千賀の塩釜」を核とした前後の文章は、卷六「小督」において、帝に召されて自分に冷たくなつた彼女に贈つた隆房の歌  
思ひかね心は空にみちのくの ちかのしほがま近きかひなし  
(394ペ)

を踏まえたものとおぼしい。また、兵部卿宮が最愛の故式部卿宮の姫君の齋院卜定の嘆きから訪れのたえてしまつた西の京の女<sup>11</sup>按察使の君のあたりの寂寥を叙した、

まことや、かの草の庵には、おはしまさで久しうなるまま、いとも寂しく、荒れたる軒の板間もる月のほかに、おとなふものもなき心地して、ものあはれなるに、云々  
(647ペ下)

とある一節は、一応、『古今和歌六帖』第四・かなしび(統国歌大観三三三三〇番)や『和漢朗詠集』卷下・政宮付巻(日本古典文学大系五三七番)に見える詠入しらずの歌、

君まさで(君なくて)『和漢朗詠集』荒れたる宿の板間より 月のもるにも袖はぬれけり

を踏まえた文飾と見てよいが、さらに、  
更け行くままには、荒れたる宿のならひとて、古き軒の板間よ

(230ペ)

り、<sup>12</sup>もる月影ぞくまもなき。という、同じく右の歌を踏まえた、卷三「少将都帰」の一文とも関わりがありそうである。

以上のような『平家物語』との交渉の事實は、先に『兵部卿物語』の成立を南北朝以降に練り下げているのであるから、とくに成立時期の問題に波紋を投げかけるものではない。が、こうした、新興文学ジャンルの作品をも利用しつつ、自作の形成を図っているらしいことは、やはり注意しておいてよいことであろう。前述『徒然草』の影響ということも重なり合うことであるが、こうした現象の背後には、伝統的な古典が満足に享受・継承できなくなっている時代状況が考えあわせられる。そこでは、晦澁な平安朝物語を苦勞して読みぬくよりも、身近にあつて、しかも王朝的香気を失わぬ当代文学の利用に走るといふことも、時にありえたのであろう。

#### 4

さらに、中世物語の(へ観古)性のよきあらわれといえる、先行物語撰取のありようから見ておきたい。

『兵部卿物語』は四〇〇字詰原稿用紙にして六十枚余りの小品であるが、作中には、かなり多量の先行物語の撰取・引用が見てとれる。従来も、『源氏物語』はいうに及ばず、『狭衣物語』『夜の寢覚』の影響も指摘されている<sup>13</sup>。もつとも、このような平安朝の物語の投影を認めるところで、当面の成立時期を考えるための手懸りは、ほとんど与えてくれない<sup>14</sup>。が、私見によれば、新たに『山路の露』の影響が、認められてよいと思われる。

ところで、『山路の露』の影響などという、およそこれまでの物語史研究からは問題にされたこともない視座をもち出そうとする以上、本題に入る前に、やはりそれ相当の説明をしておくべきであらう

う。

\* 周知のごとく、『山路の露』は、『源氏物語』第五十四帖「夢の浮橋」巻を承けて、薫と浮舟のその後を綴った小品である。その成立時期に関しては、本位田重美氏の建礼門院右京大夫作、文治四・五年（二六九）前後成立との大胆な仮説があり、岡一男氏も賛意を表しておられるが、一般には、『風葉和歌集』に見えず、南北朝期成立の『源氏小鏡』においてはじめて一卷名として記されていることから、ほぼ鎌倉末から南北朝にかけての成立といわれる。従来の作品評価としては、

独立した物語でもなく、後世に影響するほどのこともない。文章を初め純粹の擬古物語であつて一歩も前進するところはない。ただ巧みな擬古性と、よく纏まつてゐるのを見るべきであらう。といった解説（『日本文学大辞典』へ昭々々々『山路の露』の項へ永積安明氏執筆）が、簡明に言い尽くしていよう。要は、『源氏物語』続篇としての限界性ゆえ、正統的な『源氏物語』の読み手にとっては、所詮あらでもがな蛇足にすぎない、ということであつた。ところが、「後世に影響するほどのこともない」と思われていたこの物語が、実に歴然と利用されていた事実を、われわれは見いだすことができる。先にも言及した、南北朝頃の成立と目される『八重葎』の、主人公中納言が小倉山の紅葉の遊宴果てての帰途、四条あたりの蓬屋に、琴の音にひかれて、ゆくりなくもヒロインを見ぞめるくだり、そこには次のようにある。

（中納言が覗き見シテイルト、侍女カ）「なほいまひとかへり」とそそのかしきこゆれど、（姫君ハ）いらへもせず、月にながめ入りて、①「見し夜の秋に」と言ひ消つは、つらき人のなごりなどを思ふにや。

（中略。中納言ハ昂ル気持抑エガタク部屋ニ押シ入ル。中納言ハ）「たゆたふ心のほ

どは、そこにこそ知りたまはめ。『その夜ながらの影は見せりき』とこそいらへまほしかりけれ。（中略）と、いとなつかしうやはらかにかたらひたまふに、云々

①②は、いずれも引用のかたちをとつており、しかも明白に韻律をもつてゐることからすると、それが和歌の一部であろうことは、誰の目にも明らかである。①について堀部氏は、「賢木」巻の源氏の藤壺への返歌、

月影は見し夜の秋にかはらぬを へだつる霧のつらくもあるかなを踏まえるときれ、今井源衛氏もそれに従われる。②についてのコメントは堀部氏にはなく、今井氏は「典拠あるか、未詳」と注する。

①の典拠として右の歌は、一見よく当てはまるようであるが、物語本文をよく読む時、①と②は非常に密接な連繋のあることがわかるのであつて、②は、ヒロインが①と口ずさんだのに対して、「それを聞いて私は②と答えたい気持がした」といつてゐるのであるから、②の典拠は①の典拠の返歌でもあれば都合がよいのである。ところが、「賢木」巻を見る限り、②にあたるものは見いだせない。とすれば、①の典拠として右の歌をもつてくるのは問題がありそうである。

少々まわりくどくなつたが、①②の叙上の条件を満たす典拠として、『山路の露』が指定できるのである。

（中略）行ひ果てぬるにや、「いみじの月の光や」とひとりこちるかたはらめ、薫昔ながらの面影ふと思し出でられて、いみじうあはれなるに、（中略）しのびがたうまもりたまへるに、なほとばかりながめ入りて、

里わかぬ雲の月の影のみや

見し夜の秋にかはらざるらん

と、しのびやかにひとりごちて、涙ぐみたるさま、いみじうあはれなるに、まめ人もさのみはえしづめたまはずやありけん、

ふるさとの月は涙にかきくれて

その夜ながらの影は見ざりき

とて、ふと寄りたまへるに、云々 (52~53ペ)

右は、小野を訪れた薫が、月をながめやる浮舟をのぞき見る条であるが、このあたり、かつて野村八良氏が、「暢達した筆づかひで、美しい光景を能く浮出してゐる」と賞讃されたところである。「八重葎」の主人公は、ヒロインが浮舟の歌を口ずさむのを耳にして、これ幸いと我が身を薫に擬して近づく——巧みなへ物語取りの手腕は、見るべきものがある。

こうした『山路の露』受容の事実は、この物語がよほど普及・浸透していたことをものがたろう。が、それにしても、これほどまでの引用のされかたは、『伊勢物語』『源氏物語』『狭衣物語』の三作以外には、まず見いだしがたいのではあるまいか。たいした重んぜられようといつてよい。もつとも、それも、おそらくは、擬古物語『山路の露』そのものかち得た評価というより、絶対的權威をもつて君臨する『源氏物語』の系列に組み入れられることによつて、いわば『山路の露』巻として、他の擬古物語群とは違つた、別格扱いを受けることとなつたのであろう。伊井春樹氏によれば、鎌倉期以来中世を通して数限りなく作られていた源氏物語歌抄出の中には、『山路の露』の歌をも載せるものがあるという。その一方で、源氏学の正統たる古注釈書の類では、『源氏物語』の一卷として扱われることはないようである。近世に入ると、承応三年(一六五三)版『源氏物語』の付録として印行されたことで、広く流布することとなつたが、それ以前にどの程度写本のかたちで伝播したものかは、明らかでない。今は深入りは避け、後考に俟ちたいと思う。

ともあれ、『八重葎』での引用態度から推察される『山路の露』の重んぜられかたからすると、他に被影響作があつても、何ら奇とするには及ばないであらう。

\*

『兵部卿物語』後半の展開を確認しておきたい。『近古小説解題』の梗概を次に掲げる。

八月二十日、右大臣の姫君は二宮にまゐりたまひ、日経るほどに宮は心移るとはなれどおのづから慰む折もあり。按察君はほのかに宮を見奉るにさだかにわが方に通ひし某の中將といへる人なり、侍従もそれと気づきて、見つけられなばいかゞせんなど憂ひ語らふ。宮もいつしかそれと知りて、人に隠れて忍びよりたまふこともあり。かくては人めも苦しきを密かに盗み出して心安きところに置かんなど勧めたまへど、按察君はさありても遂には隠れ果つまじく、心を合せて主を欺きたりと、姫君の思ひ給はんも後ろぐらく、末遂ぐまじき縁なりと思ひなして、嵯峨に父大納言の領せし土地の里人の昔忘れず折々訪ひくる夫婦を語らひ、遁れ出で、その地に隠れ、御髪おろして侍従と淋しく世をすごす。

宮は思ひ人を失ひて、姫君の許に入り給ふことも稀に、つくどくと眺めくらしたまひしが、嵯峨に若く美しき尼の住めりと聞き、もしやそれかと、長月二十日あまりの程小倉の紅葉見にかこつけていで立ちたまふ。さてその庵に立ちよりて見たまへば、由あるさまに住みなしたり。按察君の尼はそれと知りて、侍従君とともに實の子の下に隠る。宮は庵のうち見廻りたまへど、その人はあらず、脇息のあたりに数珠に添ひて扇の移り春なつかしきに、

月のみはむかしながらの秋なれど、

やどれる袖のいろぞかはれる。

宮はその側に、

雲のうへの月もなみだにくもりつゝ、

ありしなごらの影だにもなし。

とかきて顧みがちに帰り給ふ。その後も蔵人して度々御文贈りたまふが煩はしく、またもおはしましなばいかゞせんと思ひなして、尼は梅の尾に移り、行ひすまして居たりけりとぞ。

△三角関係↓出奔・出家↓再会拒否△という展開の骨格を抽出すれば、この按察使の君物語の構想が浮舟物語に負うものであることは、おのずと明らかであろう。この点の具体的な検討は、佐々木氏の詳細・的確な論考<sup>20</sup>において果されており、そちらに譲りたい。

さて、このように、浮舟物語を先蹤とする『兵部卿物語』後半の世界であるが、中に、主人公兵部卿宮が按察使の君に会いに山里を訪れるのは、明らかに「夢の浮橋」巻をぬけ出ており、むしろ『山路の露』の薫の小野訪問を想起させる。そういう目で見てゆくと、このあたりの歌には『山路の露』の歌にかような措辞・しらべをもつものが集中していることに気づく。以下に对照させてみよう（上段『兵部卿物語』下段『山路の露』。『物語和歌総覧』へ昭49△の歌番号をも付す）。

いにしへの袖のしづくにひきかへて山路の露にしぼる墨染

（按察使の君へ10△664ぺ上）

月のみは昔ながらの秋なれどやどれる袖の色ぞかはれる

（按察使の君へ11△666ぺ上）

雲の上の月も涙に曇りつつありしなごらの影だにもなし

思ひやれ山路の露にそぼち来てまたわけ帰る暁の袖

（薫へ7△60ぺ）

里わかぬ雲の月の影のみや見し夜の秋にかはらざるらん

（浮舟へ3△53ぺ）

ふる里の月は涙にかきくれてその夜ながらの影は見ざりき

（兵部卿宮へ12△666ぺ下）

のがれ来て今はと思ふ草の庵に世のさがに吹く風の音かな

（按察使の君へ13△666ぺ下）

（薫へ4△53ぺ）

あらぬ夜と思ひなしつる山の奥に何尋ね来て袖ぬらすらん

（浮舟へ11△83ぺ）

『兵部卿物語』は十四首の作中歌をもつが、按察使の君出家後の部分には半教の七首を含む。そのうち四首までもが、『山路の露』の作中歌十五首のいずれかとの類想歌であるということは、偶然のしわざとは思えない。とくに、前記梗概にわざわざ引用されている、『兵部卿物語』のクライマックスを飾る一組の歌（11△へ12△）の類想歌は、先の『八重葎』にも撮り入れられていたもので、『山路の露』がいかなる読まれたかたをしていたかも暗示していよう。

ちなみに、『山路の露』の執筆契機については、「主人公二人のその後はどうなるのだらう、という低級な興味から書かれたものにはすぎない」（『群書解題』第22巻へ昭36△『山路乃露』の項へ阿部秋生氏執筆△）とのきびしい見かたもあるが、右のような享受の実体を思う時、いちがいに「低級な興味」といつて退けてしまうのはいかたであろうか。思うに、「夢の浮橋」巻を読み終えて紫式部の非凡な結末のつけかたに感嘆するとしても、なお二人の再会を夢見るのが、むしろ自然な読者の感情なのではなからうか。浮舟の道心なるものも、そうした読者の夢想の余地を残す、いかにもあやういものではなかったか。『山路の露』は、そのような読者の秘かな夢をのせて作られ、また愛読されたものであらう。物語史的評価は、それ相当の書きかえのなされる必要がある。

以上、『兵部卿物語』が『山路の露』の影響作たることを述べきったのであるが、ただ『山路の露』の成立時期が明確を欠き、通説のとおりであれば筆者の説く『兵部卿物語』南北朝以降成立説の傍証となりそうであるが、本位田氏の作者の推定が当たっていたり、



藤岡作太郎がいうような「平安朝の末より鎌倉時代にかけての間の作」(『鎌倉室町時代文学史』八四頁)でもあるなら、とくに成立時期を考え直す手懸りとはなりえない。『山路の露』研究の今後の進展に俟つしかないが、ともかくも、一つの興味深い事実は提出しえたと思う。

## 5

最後に、本歌あるいは引歌のことについても、一言ふれておくべきであろう。

本歌・引歌を手懸りとする成立時期推定の方法は、物語研究に際してしばしば用いられるものであるが、いま『兵部卿物語』についても試みるに、忽卒の調査で見落としがあろうと慮れるが、はつきりと問題になるものは管見に入らない。しいて挙げれば、次の歌あたりが気になる存在である。

初霜も置きあへぬものを白菊の はやくもうつる色を見すらん

(656頁上)

主人である右大臣の姫君が、自分の描いた「籬に菊」の絵を、「これはいとわろしかし」といって墨で塗りつぶしたのを見て、按察使の君が笑いながらその傍にしたためた歌。この歌からただちに想起されるのは、有名な『古今和歌集』巻五・秋下(新編国歌大観二七七番)の凡河内躬恒の歌、

心あてに折らばや折らむ初霜の 置きまどはせる白菊の花  
であり、本歌と認むべきであろうが、表現の上からは次の歌との類似性が注目される。

初霜の置きあへぬ色もかはりけり 露の籬の白菊の花

『新千載和歌集』巻五・秋下(同五三九番)の題知らずの歌、作者は二条為世(二三〇〜二三六)である。

為世の歌もまた躬恒詠を本歌とするが、『兵部卿物語』の歌と比較する時、「初霜」―「置きあへぬ」―「白菊」―「色」―「うつる・かはる」と、一首を構成する語句のコンビネーションが驚くばかりに一致するのである。諸索引を検する限り、これほど似通った歌は、他に見いだしがたい。

これをもって、『兵部卿物語』の歌が為世詠に触発されてなったものとすれば、為世詠の詠作年次を確かめていないが、二度の勅撰集単独撰進を果たし、二条家の宗匠として尊崇された、十四世紀、

さらに、為世詠を知ったのが『新千載和歌集』によるものだとすると、延文四年(二三九)の同集奏覽以降の成立ということになる。いづれにせよ、筆者にはたいへん都合のよい結果となるのであるが、ただ、為世詠なり『新千載和歌集』撰入歌なりが他にも影響を指摘できるならともかく、今のところ孤例であり、偶然の一致ということもありうるので、断定は慎みたい。

## 6

以上、『兵部卿物語』の成立時期を「風葉集以後で鎌倉末期」とする山岸氏の説に対する疑問から、種々の内部徴証を、先行文字の投影という観点にしばって探ってきたのであるが、結論を整理すれば、

(1) 『徒然草』の影響が認められる点、その成立は南北朝期以降にひき下げた方がよいと思われる。

(2) その他『平家物語』や『山路の露』の影響も見られ、あまり早い成立を考えるのは疑問であろう。

ということになる。

実をいえば、本稿では、成立時期考察を眼目としながらも、いつ

からいつの間かといった詰めを、まったく試みえなかつた。とくに下限については何ら言及するところがなく、その点では羊頭狗肉の誇りをまぬかれない。しかし、成立時期考察にあたっては決定的なものも提示しえなかつたとはいへ、その過程で指摘した諸事実は、物語史研究の上から考えるべき課題が少なからず示唆されていたように思う。筆者自身、論述に際し、そのあたりには意を用いていたつもりである。

ともあれ、この期の物語の研究は、今なおすこぶる立ち遅れが目立つのであって、少し細かく読み解いてゆけば、作品の成立や形成に関わる種々の手懸りが、容易に得られそうなのである。なおしばらく、こうした基礎作業にしたがいたいと思っている。

(一九八三年十一月稿)

### 注

- (1) 横山重・巨橋類三編『物語草子目録 前篇』(昭12)113頁。
- (2) 『日本文学書目解説』(鎌倉時代下)(昭7・9)、『若波講座 日本文学』(内)。
- (3) 『兵部卿物語』の引用は『続々群書類従 第十五 歌文部』(明40)所収の活字本に拠り、所出ページ・上下段の別を示した。なお、1節ではとくに私意をまじえないよう活字本の濁点を除いたかたちで掲出したが、2節以下では適宜校訂を加え、読みやすくした。
- (4) 『物語の流れ』(「解釈と鑑賞」昭55・1)。
- (5) 日本古典文学大系『方丈記・徒然草』(昭32)125頁。以下、諸作品の引用にあたっては、適宜表記等に手を加えた。
- (6) 『徒然草』の虚構性(「国語と国文学」昭51・6)。
- (7) 『散佚物語』(「八重葎」に就いて)(「国語国文」昭9・7)。
- (8) 『鎌倉の小説』(『中世文学の構想』昭56)所収。なお、同書所収の別稿「近古小説寛書―悲恋物語と種子物語―」(初出「国文学研究」6輯 昭11・6)にも、ほぼ同趣旨の考察がある。
- (9) 『平家物語』の引用は日本古典文学大系『平家物語』(二冊 昭34・35)に拠り、所出ページを示した。
- (10) 注(2) 山岸論文、注(8) 佐々木論文等参照。
- (11) ただし、『兵部卿物語』撰取の『狭衣物語』の本文系統に関しては問題が存する。三谷栄一著『物語文学史論』(昭27)第三章、片岡利博『兵部卿物語』の構造―『狭衣』、『小夜衣』との比較を通して―(「語文」35輯 昭54・4)参照。
- (12) 『山路の露』の作者(「国語国文」昭30・12)、『源氏物語山路の露』(昭45)解説

に吸収)。

- (13) 『八宇治十帖』以後―『山路の露』『すもり』『雲隠六帖』のことなど―(「言語と文芸」創刊号 昭33・11)。
- (14) 今井源衛編『やへむぐら』(昭36)67・70頁。
- (15) 日本古典文学全集『源氏物語』(昭44)118頁。
- (16) 注(14)に同じ。
- (17) 『山路の露』の引用は注(12)本位田氏著書所収の第一類本に拠り、所出ページを示した。
- (18) 『鎌倉時代の小説』(昭6・8)、『若波講座 日本文学』(内)。
- (19) 『源氏物語注釈史の研究 室町前期』(昭55)第二部第二章第七節。
- (20) 注(8)に同じ。
- (21) このことは、『山路の露』の序文によつてもうかがわれるところである。「ただ、かの小野の里人に尋ねあひたりしありさま、こなたかあなたの御気色くはしう見ける入の、夢のやうなる御仲の、あはれにしのびがたくおぼえけるままになにとなく筆のすさみに書き置きはべる」(33頁)。

——九州大学文学部助手——